

フライシュタットと南ボヘミアの小都市群

東京理科大学・小布施町まちづくり研究所長

川向正人

フライシュタット(Freistadt)

交流する相手のまち、若い元気な市長だ。

オーストリアとチェコ（南ボヘミア）との国境線辺りに位置する。（北緯 48° 30′ 42″）

市長はクリスチャン・ヤクス氏（オーストリア国民党）。

サハリンの南 3 分の 1 位の緯度

12.88 平方キロ、標高 560m、人口（2008 年 1 月 1 日現在）7,437 人。

オーストリアの上オーストリア州都・工業都市リンツから北に 40 キロ、チェコの南ボヘミア州都チェスケー・ブジェヨヴィツェから南へ 60 キロのところにある。

ハプスブルク家支配がはじまる前のバーベンベルク家によって、13 世紀初頭（1220 年頃）に、ドナウ流域からボヘミアに至る南北交易路上の交易都市として、既存の集落を拡大する形で、計画され整然と建設された。このことは今日の都市地図からも読み取れる（中央広場・街路の形態）。Stadtrechte、Marktrechte、Niederlagsrechte、Meilenrechte などの都市としての権利を与えられ、まちと住民が保護された国境都市(Grenzstadt)である。

最初は鉄と塩を、後にはビールも商うようになり、鉄製品を生産することで発展した。1507 年と 1516 年に都市大火が続き、そこからの復興によって今日の都市景観が決定されている。中世都市の核の部分、周囲を巡る城壁と壕が今日まで残ってきた。

30 年戦争とその後の戦争によって国境都市の地位も特権も失い、衰退する。1770-80 年

のビール醸造の隆盛によって、まちが勢いを蘇らせ、国立のギムナジウム（中・高等学校、1867 年）などの学校が創設され、1850 年から地域の行政の中心となる。1873 年からは軍隊が駐留するようにもなった。

第 2 次大戦では戦災を受けなかったが、1955 年の条約締結までの 10 年間、ソ連軍が駐留した。その後、復興の時代に入るが、中世の都市景観は維持されている。

旧市街への入り口はリンツ門。広い中央広場に面して、現在、市庁舎や 14~15 世紀創建の地区教会（1690 年バロック様式に改築、1967 年にゴシック様式に戻す）が建つ。北東隅には 14 世紀のフライシュタ



ット城があり、50mの塔からまち全体を眺めることができる。

### 塩の館(Salzhof)

この建物はフライシュタット最古の建造物で、フライシュタットが「都市」となる前からこの地にあり領主の城館(Burg)だった。前の通りは活気のある南北交易路。1363年に新たに城が北東隅に建設され1395年から穀物倉となった。16世紀初頭の2度の大火の後、1563年に塩の商いがハプスブルク家の手にわたった。1648年からこの倉庫は塩の貯蔵に使われ、ハプスブルク帝国の塩管理局が管理するようになり、今日の呼称「Salzhof」を得た。1832年から塩が馬鉄道



(馬が引く鉄道)でボヘミアに輸送されるようになって、塩の取引所としての重要性を失い、1850年にはこの建物も売却され、北棟は劇場に変更されたが、塩の倉庫として1920年代まで使用された。

1997年にフライシュタット市は州の補助を得てこの建物を買収し、文化財保護局の指導を得ながら完全に修復。修復費用は520万ユーロであった。2003年に文化センター(写真)として再生し、州立音楽学校も入っている。

### チェスキー・クルムロフ(Český Krumlov)

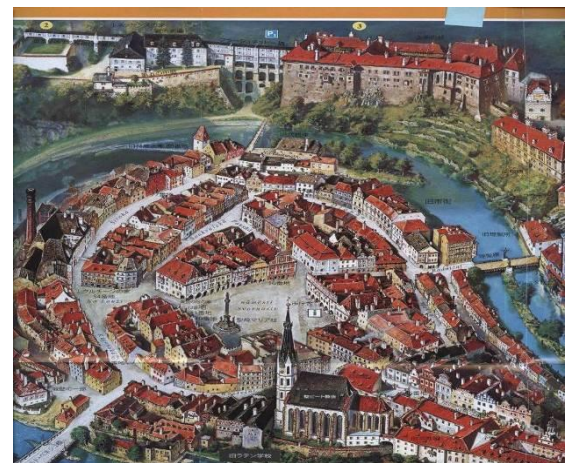
陸のヴェネチアみたいなまち。

1992年にユネスコ世界遺産登録。

人口14,056(2007年9月24日現在)、面積22.16平方キロ、標高492m。

ヴルタヴァ(モルダウ)川とともにあり、その大きく蛇行する「丸い渦」(クルムロフの古ドイツ語に名称の起源)に発達した都市。まちの歴史が文書で分かるのは1253年から。13世紀にはヴィーテク家が居城を構えていたが、1302年にチェコの最も強大な貴族だったロジウムベルク家が入り、以後300年にわたって支配。同家の「五弁のバラ」の紋章がまちのあらゆるところに残っている。この後、1602年からハプスブルク家、1622年からエッゲンベルク家、1719年~1945年までシュヴァルツェンベルク家(ウィーン宮廷との関係が強く、ウィーン文化が浸透)が支配した。

20世紀になると、まちは重大な変化を被る。1938~45年にはナチスによって彼らの言う「南ドイツ」に併合、ユダヤ人の追放・強制連行、そして第二次大戦後はドイツ人の追放(たとえば1910年には8,662の総人口のうちドイツ人7,367、チェコ人1,295)。1949年には国によりシュヴァルツェンベルク家所有の城館を没収。1968年にソ連軍の侵攻。1989年までは、ここは薄汚れた田舎町で、ど



ここについても煙突の煙と製紙工場の臭いがしていた。それでも細い路地や小広場には、まち独特の雰囲気と美しさが素朴に残っていた。

1960年代に入って、国からまち全体が保存対象「都市保存記念物」に指定され、1989年には城館一帯も国の文化財に指定されて、1992年に歴史地区全体がユネスコ世界遺産に登録。2002年8月ヴルタヴァ川の大洪水で大きな被害を受けた。

かつては9つの門があったが、19世紀の間に交通と工業の進展のために取り壊されて、現在はブジェヨヴィチェ門1つが残るのみ。中世には、城の下のラトラーン地区とヴルタヴァ川を挟んで反対側にある「古い町」と呼ばれる中心部の一画があった。両者を木造の橋「理髪橋」（橋のたもとに「旧理髪所」がある）が結ぶ。もう一画「新しい町」があって、この3つの街区の間をヴルタヴァ川が大きく蛇行する。

小高い丘の駐車場から、イエズス会神学校（現在、郷土資料館）の前を通り、ホテルになっているイエズス会寄宿舍、聖ヴィート教会（ゴシック様式、1407年）、13世紀に計画的につくられた中央広場（周囲は、もとは木造で後に石造になった14~15世紀の建物、大半がアーケードで結ばれている）を抜け、旧ビール醸造所（現在、エゴン・シーレ・アートセンター）から理髪橋を渡り、ラトラーン通りを歩いて城に向かった。入口にあるのが最も古い部分フラーデク（小さな城の意味）、この塔はルネサンス様式で、美しい姿はどこからも見える。城のなかには世界的に貴重で有名なバロック劇場（1766年完成）もある。帰りには、ラトラーン通りから途中でヴルタヴァ川に向かうと、国際陶芸アトリエがあり、さらに旧宿泊所に。対岸の「古い町」の家並みを眺める。



### ホラショヴィツェ(Holašovice)村

これが世界遺産かと不思議に感じた。

1998年ユネスコ世界遺産登録

すでに1263年にこの村の記録がある。1520~25年のペストでほぼ全滅。修道院が入ってきたことによってドイツ・バイエルン地方やオーストリアからの入植が続き、むらは回復するが、チェコ人のまちやむらの間にドイツ人の居住地があるという状態になった（1895年時点での住民構成；ドイツ系157人、チェコ系19人）。第二次大戦後のドイツ人追放によって、再びむらは壊滅状態に陥り、1989年までは放置された状態が続いた。1990年以降、修復工事が進み、再び住む人々が現れ、人口も140人程度に回復している。

典型的なボヘミアの村の形式で、120棟の煉瓦造・切妻屋根の建物があって、戸数では23戸になる。母屋と納屋が道路側に妻を見せて並び、間に中庭がある。母屋と納屋を高い塀でつなぎ、中央に大きな両開きの扉をつ



けて、道路に対して中庭を閉じている。

建物そのものは18世紀から20世紀のもので、大半は19世紀後半である。ファサードは、南ボヘミアの土着のバロック様式で仕上げられている。村の中央にあるチャペルは1755年に創建されている。

なお、「バロック村」と言われる例は、ここ以外にもある。

### チェスケー・ブジェヨヴィツェ (České Budějovice)

郊外にも路村がよく残っている。

南ボヘミアの州都。ビールと鉛筆のまち。マルシェ川とヴルタヴァ川の合流地点に1265年に建設された。19世紀に南ボヘミアの文化・経済の中心都市になる。1828年にヨーロッパで最初の馬鉄道がリンツとの間に開通した。



### トジェボニュ (Třeboň)

人口 8,839 人 (2005 年現在)、面積 98.33 平方キロ、標高 434m。

淡水魚料理がうまかった。

12世紀半ばに都市として成立した。1366年にロジェムベルク家が支配して、15世紀後半に同家の手厚い保護の下に全盛期を迎える。そして、池を整備して養魚が始まり、この地域が養魚と淡水魚料理で有名になる。1611年以降は、ハプスブルク家、それに続いてシュヴァルツェンベルク家が領主となる。19世紀以降、まちの価値は次第に低下してゆく。



### スラヴォニツェ (Slavonice)

ホテルの窓から広

場を眺めると、雪の町なみが朝日で輝いていた。

歴史的にはモラヴィアに属すが、現在は南ボヘミア州に入っている。

人口 2,671 人(2007 年 12 月 31 日現在)、面積 45,72 平方キロ、標高 512m。

ボヘミアとモラビアとの境界にある。もともとスラブ人の集落があつて、都市としての

成立は12世紀末まで遡ることができる。13世紀から14世紀にかけて市場都市として成長し、城壁を建設して自衛するようになった。このまちが最も栄えるのは16世紀で、ルネサンス様式のファサードが中世の町なみの前面につく。その所有者の豊かさが、このファサード表現 (スグラフィット：写真 色の違うプラスターを、層を



重ねて塗り、上層を引っ搔いて下層の色を出す壁面仕上げ法)の豊かさに示されている。内部でも、20世紀のチェコ・キュビズムを思わせる見事な造形の尖頭アーチ式天井(写真)を見ることができる。プラハとウィーンを結ぶ交易路の、馬を交換する中継所ができることで、まちはさらに栄えたが、30年戦争に続く疫病、大火などで、まちの発展は止まり、やがて衰退してゆく。



20世紀に入って、第二次大戦後1945年6月のドイツ系チェコ人の追放(参考)などによって、まちの衰退に拍車がかかったが、美しい都市景観はそのまま残った。2つの広場があって、広場の周囲には、ルネサンス様式のファサードの付いた町家が並ぶ。1961年8月31日に「都市保存記念物(Town Reservation Monument)」となる。

1989年は、このまちにとっても再生に向かう記念すべき年である。豊かな歴史文化を感じさせる雰囲気と生活が、多くの観光客を集めるようになったのである。近くには、深い森と美しい池の自然景観が広がり、ここかしこに昔の城館があって、訪れる観光客はますます増加している。

中世・ルネサンス期の24棟の美しい町家が、2003年にユネスコ世界遺産の候補になったが、テルチが登録されたのに対して、このまちは採決の前に登録申請を取り消している。

参考：人口動態(ドイツ人の割合)

1880年2662(ドイツ人2654、チェコ人8、その他0)、1921年2324(1832、294、198)、1930年2288(1817、323、148)

## テルチ (Telč)

1992年ユネスコ世界遺産登録。

どこもかしこも雪をかぶった家々が陽光を受けて輝き、荘厳な感じすらしたのだった。新雪を踏みしめて広場を渡ってゆくと市民の姿を眺めていると、ああ、ヨーロッパのまちだなと感じる。広場が、日常生活の舞台なのだ。

モラビアに属する。人口5,812(2006年現在)、面積24,86平方キロ、標高514m。

プラハとウィーンの丁度中間に位置して、昔から交通路の重要な中継点だった。都市としては13世紀半ばに成立したと考えられるが、記録上に現れるのは14世紀半ば。当初は中世のゴシック様式のまちだったが、ゴシックの城を含めて城壁を整備し直して、家並みのファサードがルネサンス様式につくり変えられた。



この頃から、1760年代から1945年までのPodstatsky-Lichtenstein家に至るまで、まちは封建領主・貴族たちに領有された。まちをつくり変え、整備したのは、彼ら封建領主・貴族だった。そして、もう一つの勢力が、フス派の宗教改革を抑え込む形で入ってくるイエズス会である。

大きな広場が中央にあり、その端部に**テルチ城・庭園 (写真)**がある。もともとゴシックの城だったものが、16世紀後半にルネサンス様式に改築された。内部には現在、美術館・ギャラリーが入っている。その横に建つ**単塔(60m高)**と**聖ヤコブ教会**は、まちと同時に建設されたものだが、現在の姿になったのは15世紀半ばである。この周囲にイエズス会の修道院・教会が建設されている(17世紀半ば)。

**町役場**と**インフォメーションセンター**は、広場の西側の家並みのほぼ中央にある。その建物は、既存のゴシックの町家2棟を合わせたもので、16世紀半ばにイタリア人建築家によってこの様式に改築されたと考えられている。

広場を囲む家並みは**アーケード (写真)**を有し、歩行者を雨や雪から保護している。

